令和元年度

常葉大学 地域連携事業

実施報告会

（令和元年 9 月 10 日）

常葉大学

目次

常葉大学地域連携・交流推進基本方針 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

地域交流・連携推進事業　概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

地域交流・連携推進事業（平成 30 年度採択事業）

1-1. 掛川市における教育プログラム支援事業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

1-2.「あそぼうあそぼうＡＢＣ」（西奈生涯学習センターとの共催事業）の実施 ・・・・ 8

1-3. 静岡市の東静岡にぎわい創出事業への支援 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10

1-4. 多文化共生に資する日本人住民と外国人住民の交流事業 ・・・・・・・・・・・・・・ 12

ポスター発表事業

2-1. 大学生による東洋医学的なセルフケア指導の試み
～運動部の中学生・高校生を対象に～・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

2-2. 地域貢献センター学生スタッフ Link ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

2-3. 小山町との協働事業：金太郎を活用した町の広報戦略 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 20

2-4. 自転車ツーリズムとゲストハウスによる地域振興の研究
～ツール・ド・フランス藤枝～ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

2-5. 老若男女が立ち寄りやすい新たな居場所づくり
～学生が運営するコミュニティカフェ～ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

常葉大学地域連携・交流推進基本方針

〔平成 27 年 12 月 14 日制定〕

１．地域連携・交流の基本理念

常葉大学（以下「本学」という。）の３つの教育理念（知徳兼備、未来志向、地域貢献）の実現に資する「ナショナル～ローカルな次元」の地域連携・交流にかかる諸活動を積極的に支援・推進することを通して、「美しい心情をもって、国家・社会・隣人を愛し、堅固な意志と健康な身体をもっていかなる苦難にもうち克ち、より高きを目指して学び続ける」（常葉学園「建学の精神」）人間像の具現化を図るとともに、地域社会の活性化・進展に資するものとする。

２．地域連携・交流の目的

本学が取り組む地域連携・交流は、地域社会の動向やニーズを的確に捉えて、地域社会の人的基盤を支え、地域社会や地域経済の発展等に寄与することを目的として、次に掲げる事業等を展開する。

(1) 地域の活性化等を担う人材の育成
(2) 地（知）の拠点としての大学の役割・機能の発揮
(3) 本学の資源を活かした地域社会に対する協力・支援
(4) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開
(5) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成

３．地域連携・交流の基本原則

本学が取り組む地域連携・交流は、以下の諸原則のもとで行うものとする。

(1) 効果性：本学の３つの教育理念の実現に対し効果的であると認められるもの
(2) 組織性：全学的ないし学部・学科等の単位で組織的に実施するもの
(3) 計画性：中長期の展望のもとで計画的に事業を実施するもの
(4) 公平性：交流事業への参加の機会が学生・教職員に平等に開かれていると認められるもの
(5) 互恵性：連携先と互恵的な関係性のある事業を実施するもの

４．地域連携・交流の事業内容

本学が取り組む地域連携・交流の事業内容は、次のとおりとする。

(1) 地域の活性化等を担う人材の育成
　① 地域人材の育成のためのカリキュラム・授業内容の充実
　② 正課内外での地域貢献活動の実施

③　学生の地域での就労促進

④　卒業生に対する継続的な学習機会の提供

(2) 地（知）の拠点としての大学の役割・機能発揮

①　教育研究成果の情報発信及び成果還元

②　多様な学習機会の提供

③　社会への提言活動

④　学生の人的資源の活用

(3) 産官学連携による地域連携・交流事業の展開

①　共同研究(商品開発等)の実施

②　地域課題解決のための共同事業の実施

③　起業及びベンチャービジネス等への支援活動

④　地域活性化のためのイベント・実践報告会等の実施及び支援

(4) 地域連携・交流に関する学内の機運醸成

①　実践報告会・シンポジウム等の開催

②　実践事例集の作成・刊行

③　研究推進、教育改善等に対する連携・交流事業の効果検証

５．地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結

地域の特性及びニーズに応じた地域連携・交流事業を展開するため、地方自治体、各種団体等との連携・交流協定の締結を促進する。

６．自己・外部資金を活用した地域連携・交流事業の実施

本学の専任教職員が基本理念・基本原則に沿った地域連携・交流活動を主体的に推進することができるよう、学内における助成金の交付、外部資金への応募を促進する。

７．地域連携・交流にかかる推進組織及び環境整備

(1) 地域連携・交流の充実及び円滑な推進等を図るための学内体制を構築する。

(2) 地域連携・交流事業の充実を図るため、学内外の関係者から成る連携推進組織を整備・運営するなど、連携推進体制及び環境の構築を進める。

地域交流・連携推進事業　概要

本事業は、本学の教職員が個人およびクループで地域住民や関係機関等と連携を図って地域との交流・連携事業の取組みに対して支援（所要経費の一部を交付）をするものです。

助成要件及び条件

地域の活性化又は発展に貢献又は寄与するもののほか、次のすべてに該当し、大学としてのメリット又は効果があると認められるものに対して助成をする。

(1)　事業の効果が本学の教育・研究に反映若しくは還元されるもの又は地(知)の拠点である大学として相応しいと認められるもの

(2)　本学が主体性をもって実施するもの　（単なるボランティア活動又は行事への協力は対象外とする。）

(3)　一過性のイベントや行事ではないこと

(4)　地方自治体、民間企業・団体又は地域団体等から資金、人的な支援又は協力等が得られるなど、地方公共団体等との共同又は連携が明らかであるもの

助成対象事業

次のいずれかに該当する事業に対して助成をする。

(1)　地方自治体及び民間団体等と共同又は連携して、地域活性化等を図ることを目的として実施する事業

(2)　本学の研究成果等を地域に還元又は情報発信（成果の報告又は発表等）することを目的として実施する事業

(3)　産官学(産学又は官学も含む。）連携により地域や産業の活性化等を図ることを目的として実施する事業

(4)　その他学長が特に認める事業

交付対象金額

1 事業に対して、原則として 500 千円を上限とする。

地域交流・連携推進事業

～平成 30 年度 採択事業～

1-1	掛川市における教育プログラム支援事業

事業担当者

教育学部生涯学習学科　木宮敬信（代表）、教育学部心理教育学科　百瀬容美子
教育学部生涯学習学科　堀井啓幸、教育学部生涯学習学科　鈴木守、教育学部生涯学習学科　黒岩一雄

目的・概要

本事業は掛川市と常葉大学との包括協定をもととして実施されるものであり、大学の持つ教育資源を地域に還元することとともに、学生にとっての学びの場、および教員にとっての研究の場を地域から提供することによって、双方に利点のある事業とすることを目的としている。

＜教育委員会との連携事業＞

市内の小中学校での通学路点検に専門的知見を加えることで、児童生徒の安全確保に貢献する。また、教育委員会と連携し安全に関するアンケート調査を実施、その結果を踏まえて今後の教育プログラムの立案に活かすほか、児童生徒や教職員対象の安全教育や講演会で成果を還元する。

＜発達相談支援センターとの連携事業＞

新設された「掛川市発達相談支援センター」に専門的知見を提供し、障害を持つ児童生徒や保護者に対する効果的な支援を行う。相談員へのアドバイスに加え、直接児童生徒や保護者と関わる機会を持つことを含んでいる。また、発達障害児の安全上のリスクが高いことから、実態調査や効果的な安全教育支援を行う。参加した学生ボランティアにとっては、大学で学んだ知識の実践や研究の場として活用することができ、自身の将来に役立てる。

事業内容・方法

＜教育委員会との連携事業＞

① 児童アンケートの実施

教育委員会が選出したモデル小学校において、小学生に対する交通安全アンケートを実施した。アンケート用紙は大学が作成し教育委員会が実施した。集計および結果のまとめ、公表は大学が行った。

平成 30 年 4 月～6 月：調査の実施、平成 30 年 9 月：結果の公表（第 19 回日本安全教育学会）

② 通学路点検の実施（9 月に 3 日間で小学校 6 校で実施）

教育委員会が行う防犯および交通安全を目的とした通学路点検に大学から専門家として参加し、アドバイスを行った。教員、PTA、地域関係者、関係機関関係者等の点検参加者への周知、取りまとめについては、教育委員会が行った。

③ 安全教育および研修、講演の実施（12 月 19 日、会場：掛川市文化会館シオーネ大ホール）

児童アンケートや通学路点検の結果を踏まえて、関係者（教職員、地域関係者、関係機関、PTA など）

を対象とした講演を掛川市安全安心まちづくり研修会の中で行った。
タイトル：子どもの安全について考える～交通事故や犯罪被害に遭わないために～
＜発達相談支援センターとの連携事業＞
① 発達相談支援センターの運営支援（平成 30 年 7 月～平成 31 年 2 月）
センターの新規開設にあたって、相談員へのアドバイス等を適宜行ってきた。現地での打ち合わせのほか、メールや電話での相談も行った。
② 共催イベントの開催（平成 31 年 1 月 20 日（日））
学生ボランティアと共同で、発達障害の啓蒙を目的としたイベント「でこぼこワールド」を開催した。イベントの企画、運営に学生が関った。学んでいる専門性を活かして、様々な企画を提供することができた。学生ボランティアの募集は、専門性を活かすために、事業担当教員の授業やゼミを中心に行った。
場所：掛川市発達相談支援センター「のびる一む」　参加者：約 200 人
イベント内容：発達凸凹特性体験、お助けグッズの展示や体験、トーキングゲーム、体験型ゲーム、放課後等デイサービスの紹介、就労関係機関の紹介、余暇の過ごし方アイディア展など

事業成果

＜教育委員会との連携事業＞
通学路点検において要対策危険箇所の具体的対応について協議を行った結果、いくつかの対策が施された。抜本的対応が必要な箇所についても、PTA や地域の協力を得て人員配置による対応を早急に検討することとなり、児童生徒の安全向上に向けた取り組みが具体化した。また、掛川市危機管理課の要望を踏まえた講演では、通学路の安全に関する関係者の誤解を解き、予算の優先順位の理解を深めるという目的を果たすことができたものと考えている。教育委員会と連携して行った児童アンケート結果については、第 19 回日本安全教育学会で発表した。
演題：掛川市内の小学校を対象とした交通安全教育の実践と評価について
＜発達相談支援センターとの連携事業＞
専門的知見を大学との連携で補いたいという先方のニーズに応え、相談員や利用者へのアドバイスを行った。専門機関のない掛川市にとっては非常に重要な位置付けとなった。参加した教員にとっても、担当授業での成果還元に加え、現場の方々や利用者からの生の声から今後の研究につながる知見を多く得ることができた。また、学生がボランティアとして関わる機会は、教育学部の学生にとって貴重な体験学習の場となった。心理教育学科の学生にとっては自分の研究課題を考える機会となった。生涯学習学科の学生にとっては、選書および読み聞かせサポート、体験型ゲームの実践など、専門的知見を活かす機会となった。

今後の展開

本事業は本年度継続採択されなかったが、掛川市からは引き続き連携の依頼をいただいている。現在、城北小学校の支援学級へのサポートして学生ボランティア 2 名を派遣している。また、発達相談支援センターでの共催イベントについては本年度も実施予定であるが、予算確保について双方で検討しているところである。教育委員会との連携事業についても、引き続き通学路点検や安全教育の実施等で個々の教員との連携体制を継続させていく予定である。

1-2	「あそぼうあそぼうＡＢＣ」 （西奈生涯学習センターとの共催事業）の実施

事業担当者

教育学部(教授)　永倉由里

教育学部初等教育課程（平成 30 年度 1 年生）　谷口光平、鈴木亜良太、清万利子、大冨綾乃、瀧口大生、田中杏樹、堀内美咲、森下佳樹　他

目的・概要

小学 1 年生、2 年生を対象とする①クイズ、ゲーム、②パネル・シアター・絵本、③協力学生の専攻・特技を活かした内容の子ども英語活動を行う講座「もっとあそぼうＡＢＣ」の実施（西奈生涯学習センターとの共催、詳細については担当者大川様と調整済）。

同時に小学校での英語指導を担当することになる学生にとっては、格好の実践の場となる。

事業内容・方法

静岡市広報誌「しずおか気分」および Web 上で募集し抽選で選ばれた２０名の１，２年生を対象に英語講座を開講する。

第１期：8 月 9 日（木）、16 日（木）、23 日（木）10:30~11:30

第２期：12 月 12 日、12 月 19 日、1 月 16 日

＜地域との連携＞

西奈生涯学習センター（〒420-0911 静岡市葵区瀬名 2 丁目 32 番 43 号 TEL: 054-265-2468）と共催。

＜学内外への配信＞

大学のホームページに実施報告（記事と写真）を掲載。

↑　募集用ちらし

事業成果

好評のうちに無事終了。令和元年度も春夏と秋冬に開講。

今後の展開

1．生涯学習センターの担当者と共に地域のニーズに応える内容へのヴァージョンアップを目指す。

2．有志学生をさらに受け入れ、来年度以降も継続できる体制を作る。

3．学生の意見・発想を同講座の内容、教材教具の作成、研修、録画・編集等に反映させる。

4．一連の活動過程（準備→実践→振り返り）でのディスカッションの時間を確保し、活動の内容、段取り、報告の充実と効率化を目指す。

あたま・こころ・からだを“On”に

小学 1、2 年生（20 名）を対象とする子ども英語あそびの講座の企画・運営

「パネル・シアター」

身近にあるものを視覚的に確認しつつ、英語を使って考えてみることで視覚と聴覚の２つの方向から英語に触れることを目的とした。

また、ストーリー性を持たせることで、子どもたちの興味をひきつけることができた。

「どっちが好き？ゲーム」

子どもたち自身が、自分たちの感情を入れながら、実際に英語を発音してみる経験になった。

子どもたちが、自分が好きだと思ったものを英語でどう発音するのかを学生に尋ねているような場面もあり、積極的な姿勢が見られた。

「手遊び（グーチョキパー）」

子どもたちも一度はしたことがある手遊びを英語でやってみることで、英語に対する子どもの苦手意識を軽減することができた。右手と左手で出来た形が何であるかを考え、さらに英語でどう表現するかを考えた。

「クリスマス」

パネル・シアターによる「赤鼻のトナカイ」（実は、ルドルフはいじめられっ子。外見で判断したり、差別はいけないというメッセージが込められた深～いお話。）、クリスマス・ソング、世界のクリスマス、クリスマス・ツリー作りなど、盛沢山のスペシャル・プログラムに子どもたちも Very Happy!!

1-3	静岡市の東静岡にぎわい創出事業への支援

事業担当者

教育学部生涯学習学科　堀切正人（代表）、　教育学部生涯学習学科　白木賢信
教育学部生涯学習学科　鈴木守、　教育学部生涯学習学科　田井優子

目的・概要

本事業は、静岡市からの要請に応え、東静岡駅北の市有地「東静岡アーツ＆スポーツ／ヒロバ」のにぎわい創出事業を支援するものである。本学学生の発想力と行動力を、市政の重要課題の一端に活かすことを目的とする。

静岡市は、「第３次静岡市総合計画」において、中心市街地の活性化を市政の重要課題とし、その拠点として静岡・清水両都心とともに、東静岡副都心を挙げている。そこで長年活用案が定まらず空き地となっていた東静岡駅北口市有地を「文化・スポーツの殿堂」として振興することとし、「東静岡アーツ＆スポーツ／ヒロバ」の呼称のもと、2017 年にはその取り組みの第 1 弾としてローラースポーツパークが開業した（指定管理による民間業者への委託）。しかしながら、この地の活用はまだ端緒についたばかりであり、特に広大な芝生広場は、いまだ活性化には程遠い状況である。市としてはこの地のさらなる利活用を目指して、多様な事業やイベント企画を模索しているところである。

そこで、本事業は、若者ならではの発想力と行動力で、市民対象のワークショップイベントを開催することにより、にぎわいを創出し、もって大学として地域課題に貢献しようとするものである。

現場と実施状況の全体写真（2018.12.8）

事業内容・方法

「東静岡アーツ＆スポーツ／ヒロバ」の事業を所管する静岡市まちは芸術推進課、および関係する静岡市文化振興財団等と連携しつつ、当地を会場とした一般住民対象の創作ワークショップを、学生が企画し、実施する。その概略は、市関係部署と連絡を取り合い、ヒロバ全体の年間スケジュールを調整し、まずは本学学生のイベント実施日を確定した。一方、大学内では、教育学部生涯学習学科と造形学部の博物館実習生を中心とした学生を募り、現地見学、企画案提出、実施体制、スケジュールなどの立案作業を行う。市ほかとの企画調整会議を経て企画を決定し、教員監督のもと、学生の手によりワークショップを実施した。また事前に東静岡町内会にも挨拶と説明をした。

ワークショップの内容は、「にぎわい創出」を目的に、できるだけ多くの一般市民が誰でも自由に参加できるものとし、そのために申し込み不要、参加料無料、参加年齢の制約なし、開催時間内の自由参加といった、参加しやすい実施方法を取った。具体的には、芝生広場全体を使って、ライン引きによる富士山の描画と、その上に巨大シャボン玉を作って霞をたなびかせるものとなった。イベント名も学生たちに案出させ、「みんな de あーと　しぞーか　～ヒロバに線を引きましょう。シャボン玉も飛ばしましょう～」に決定。

12 月 8 日、午前 9 時現地集合、準備。午後 1 時～4 時、イベントを実施。一般参加者は 73 名。午後 5 時より片付け、撤収。午後 6 時、反省会ののち解散。後日、市関係部署への実施報告と挨拶を行った。

実施状況（2018.12.8）
左：ライン引き、
右：シャボン玉

事業成果

12 月の閑散期に 70 名を超える一般市民を集客でき、東静岡のにぎわい創出に、いくばくかは寄与できたものと思われる。一般参加者にとっては、広い敷地に存分にラインを引いたり、大きなシャボン玉を作って飛ばすなど、簡単でかつ楽しい作業ができたため、老若男女、満足いただけたようである。

静岡市にとっては、人口減とりわけ若者の県外流出が深刻化し、その対策が重要課題である状況下において、若者の参画は将来に向けて意義があったと思われる。また、近年変貌著しい東静岡市の地域住民にとっても、若い人たちによるにぎわい創出は、好意的に受け入れられたと思われる。

本学の学生にとっては、地域貢献、生涯学習の実践の場として、座学だけでは学べない多くのことを体験できる機会となり、大きな教育的効果があったと思われる。なお、大学ホームページ、および静岡新聞に記事掲載された。

今後の展開

東静岡の市有地の利活用は、いまだ決定を見ていない。当初は平成 30 年度（2018）中に、32 年度・令和 2 年度（2020）以降の方針が示されるはずであったが、先延ばしとなった。このことは、この地の現状すなわちローラーパークと何もない芝生広場が、当面、存続することを意味し、その状況下において実施可能なにぎわい創出が、市の懸案として継続されることを意味する。

その要請に対して、たとえば企画業者などへの事業委託で大型イベントを誘致し、一過的に大量動員をはかるような方法も考えられようが、地域住民や学生とによる地道で継続的な活動こそがより必要であるとも思われ、本事業の有意義性はさらに高まると予想する。

なお本事業は、令和元年度の同事業にも申請し、採択された。平成 30 年度の成果や反省、課題は今年度へ活かしたい。様々な内容のワークショップが立案可能であるので、年度ごとによって、特徴ある企画が生まれるであろう。学生たちは先輩の活動を踏まえて、よりよいものを目指そうとするだろが、そのような継続性、発展性も、本事業の可能性の一つである。

1-4	多文化共生に資する日本人住民と外国人住民の交流事業

事業担当者

経営学部経営学科　坂本勝信（代表）、経営学部経営学科　山下浩一、外国語学部グローバコミュニケーション学科　谷誠司

目的・概要

日本は、急激な人口減少問題を抱え、少子高齢化や労働力不足に直面している。そのような中、在留外国人は、2018 年 1 月 1 日現在 247 万 1458 人（2017 年法務省在留外国人統計による）と過去最高を記録し、外国人と日本人が同じ住民として相互に支え合いながら暮らしていく多文化共生社会が強く求められている。その実現に向け、様々な取り組みがなされてはいるが、十分とは言えないのが現状である。一方、浜松市には 2018 年 1 月 1 日現在 22,815 人の外国人住民（83 国等）がおり（住民基本台帳による）、在留外国人の全人口に占める割合は、2.8%と全国平均の 2.0%を大きく上回っている。市には公益財団法人浜松国際交流協会（以下「HICE」）があり、35 年の歴史を有する。HICE は、市の委託を受けて浜松市外国人学習支援センター（以下「U-ToC」）で様々な日本語教室を開講しており、約 170 人の外国人を対象に日本語教育を行っている（2017 年度実績）。その中の実践クラスアドバイザーを事業代表者の坂本が務めていることから、クラス運営に必要な日本人との交流活動に本学大学生の参加を促してきており、多文化共生社会に向けた取り組みを進めている。本事業では、過去の活動を発展的に継続したが、以下の 3 つを主目的として掲げた。

１）生活者としての外国人の日本社会へのスムーズな適応を促すこと

２）常葉大学大学生の多文化共生の意識を涵養すること

３）外国人住民と日本人住民の交流の成果を社会に発信すること

事業内容・方法

上記目的達成のため、主に以下の３つの「活動」を行った。

①U-Toc」の日本語教室で実施するプロジェクトワーク（外国人が、興味あるテーマで日本や日本人に対してインタビュー等を行ってデータを収集し、分析、考察をして発表する授業）にインタビューイーやアンケート回答者等として参加する。

②プロジェクトワーク発表会（本学留学生別科生と U-Toc 学習者が合同で実施）にて、準備や運営スタッフ、聴講者として関わる。

③U-Toc の施設見学及び、日本語授業参観に参加する。

プロジェクワークは、U-ToC 日本語教室の授業活動だが、日本人大学生が参与することによって、生の日本語や日本人の考え方に触れる機会となり、教室活動と日本社会がつながることを意味する。また、取り組みの成果を本学の学生や教職員、地域住民に発信することを通して、発表者及び、聴講者に「共に社会を

創っていく住民」との意識を涵養し、多文化共生社会実現の一端を担うことができると思われる。同時に、大勢の日本人の前で発表する体験によって、マイノリティである外国人に日本で生活していく自信を得てもらうことができる。また、本学学生は、U-Toc の施設・授業見学を通して、生活者としての外国人を支える浜松市の取り組みを知るとともに、外国語教育や外国語学習に関する気づきや学びを得ることが期待される。

事業成果

以下、活動内容ごとに、関わった学生の人数と役割を述べる。①プロジェクトワークのインタビューイーや回答者として 95 名、②プロジェクトワークの発表会（10 月 24 日、於：浜松キャンパス）の準備・運営・聴講者として 27 名、③U-Toc の施設見学・授業参観参加者として 16 名（10 名が①と重複）、④プロジェクトワーク発表会（3 月 12 日、於：U-Toc）の聴講者として 2 名、計 140 名（延べ人数）が研究に関わった。

U-Toc の日本語教室の授業参観者（教員：坂本、谷、山下／学生：経営学部生、外国語学部生）は、多文化共生や語学教育・外国語学習に関する多くの知見を得ることができた。その知見を、研究代表者の坂本は、経営学部科目「日本事情Ⅰ・Ⅱ」や外国語学部グローバルコミュニケーション学科科目「言語の学習と獲得 A・B」及び、留学生別科の日本語授業に、共同研究者谷は、外国語学部グローバルコミュニケーション学科科目「教案作成指導」等の授業づくりと運営に活かした。また、経営学部のゼミに日本語教育班を有する共同研究者山下は、学生たちが実施した U-Toc 日本語学習者に対するアンケート結果を基に、漢字教材開発に関連した卒業研究の指導を行った。

一方、学生は、授業参観や施設見学等を通し、外国語学習について学習ストラテジーの捉え直しや新たなビリーフ獲得をしたり、日本語教師志望の者は、教授法に関する多くの学びを得たりすることとなった。また、それ以外の参加学生については、プロジェクトワーク発表会聴講や日本語学習者との交流、さらに、HICE チーフコーディネーター内山氏の講義を聴講することによって、日本語学習や日本の生活への適応に一生懸命向き合おうとする、生活者としての外国人の実際の姿や、多文化共生社会実現に向けた浜松市の取り組み、また、解決しなければならない課題などを知る機会となったようである。一連の活動に参与することで、多くの学生の中に、今後外国人との共生を果たしていく当事者としての意識が涵養されたように思われる。

今後の展開

今後は、本事業を発展的に継続する予定である。具体的には以下の４点である。

１）U-Toc プロジェクトワークのインタビューイー・アンケート回答者としての参加以外に、本学学生自らが学習者との交流会を企画・運営し、主体的に生活者としての外国人と触れ合う機会を創出する。

２）日本語教育が専門の坂本・谷を中心に、U-Toc や地域日本語教室の教師等に技術的サポートを行う。

３）プロジェクトワーク発表会を本学キャンパスでも実施し、学習者の活躍の場を提供する。

４）時間的労力的に効率がよく、かつ、良質な日本語能力測定テストがほしいとの U-Toc の希望に応えるべく、坂本・谷を中心に学生とともに問題を作成した上で、情報科学が専門の山下が、ゼミの日本語教育班等においてスマートフォンで実施可能な日本語テスト開発に向けた準備を進める。

以上

ポスター発表事業

2-1	大学生による東洋医学的なセルフケア指導の試み ～運動部の中学生・高校生を対象に～

事業担当者

健康プロデュース学部健康鍼灸学科　藤田　格　健康プロデュース学部健康鍼灸学科　沢崎　健太
健康プロデュース学部健康鍼灸学科　村上　高康　　健康鍼灸学科ケアチーム T-ACT 所属の学生

目的・概要

大学生が自らの専門分野で学んだ知識と技術を、市内の部活動に取り組む中学生の身体ケア指導に生かすことで、大学としての地域貢献と人的な交流を図る。

事業内容・方法

浜松市の協働センターや高校からの依頼により、運動部に所属する生徒が、各自の競技に対する意識を高め、ケガ等を予防することを目的として、本学教員及び学生が競技内容を考慮した筋力トレーニング、ストレッチの方法及び東洋医学的なセルフケアの指導を行った。
具体的な講座内容は、中学においてはケガを予防するための筋力をつける体幹トレーニングやチューブトレーニングの紹介。肩や膝、腰などの運動時の違和感に対応する部位に経穴刺激ツールの貼付。また東洋医学的なセルフケア指導も行った。高校においては、各自の運動時の痛みや違和感の評価と、対応する部位への経穴刺激ツールの貼付。東洋医学的なセルフケア指導を行った。

事業成果

中学校では湖東、麁玉、北浜・北浜東部の４校で実施した。対象となった部活は卓球部、バレー部、ソフトボール部、バスケットボール部、陸上部、サッカー部、野球部、剣道部で、延べ 189 名の生徒が講座に参加した。高校は現在、浜松湖北高校で実施している。対象の運動部は剣道部、男子バスケットボール部で、６月と７月の講座に 30 名の生徒が参加した。
受講した生徒からは「腕や足に、体を整えるためのいくつものツボがあることがわかった。」「実際にツボにシールを貼ってもらって、わかりやすかった。」「グループに分かれて、細かく丁寧に指導してもらうことができた。」などの感想があり、好評であった。
指導にあたった学生からは「専門用語を使わずに説明することの難しさを感じたが、知識を整理することができ、勉強になった。」「実際に痛みが和らいだり、動きが改善したりする様子をみて、効果を実感できた。」などの感想があり、有意義な体験となった様子であった。

今後の展開

健康鍼灸学科では、スポーツに関心のある学生が多く、運動部でセルフケアを指導することは、地域貢献と同時に、学生自身の知識の定着や、学習意欲の向上に大きな意味があると考えている。今後は受講生に対するアンケートの実施など事業の成果を具体的に確認できるように務めていきたい。

大学生による東洋医学的なセルフケア指導の試み
～運動部の中学生・高校生を対象に～

健康プロデュース学部　健康鍼灸学科　藤田　格、沢崎　健太、村上　高康
健康鍼灸学科ケアチームT-ACT

目的・概要

大学生が自らの専門分野で学んだ知識と技術を、市内の部活動に取り組む中学生、高校生の身体ケア指導に生かすことで、大学としての地域貢献と人的な交流を図る。

事業内容・方法

浜松市の協働センターや高校からの依頼により、運動部に所属する生徒が、各自の競技に対する意識を高め、ケガ等を予防することを目的として、本学教員及び学生が競技内容を考慮した筋力トレーニング、ストレッチの方法及び東洋医学的なセルフケアの指導を行った。
具体的な講座内容は、中学においてはケガを予防するための筋力をつける体幹トレーニングやチューブトレーニングの紹介。肩や膝、腰などの運動時の違和感に対応する部位に経穴刺激ツールの貼付。また東洋医学的なセルフケア指導も行った。
高校においては、各自の運動時の痛みや違和感の評価と、対応する部位への経穴刺激ツールの貼付。東洋医学的なセルフケア指導を行った。

事業成果

中学校では湖東、麁玉、北浜・北浜東部の4校で実施した。対象となった部活は卓球部、バレー部、ソフトボール部、バスケットボール部、陸上部、サッカー部、野球部、剣道部で、延べ189名の生徒が講座に参加した。
高校は現在、浜松湖北高校で実施している。対象の運動部は剣道部、男子バスケットボール部で、6月と7月の講座に30名の生徒が参加した。
受講した生徒からは「腕や足に、体を整えるためのいくつものツボがあることがわかった。」「実際にツボにシールを貼ってもらって、わかりやすかった。」「グループに分かれて、細かく丁寧に指導してもらうことができた。」などの感想があり、好評であった。
指導にあたった学生からは「専門用語を使わずに説明することの難しさを感じたが、知識を整理することができ、勉強になった。」「実際に痛みが和らいだり、動きが改善したりする様子をみて、効果を実感できた。」などの感想があり、有意義な体験となった様子であった。

今後の展開

健康鍼灸学科では、スポーツに関心のある学生が多く、運動部でセルフケアを指導することは、地域貢献と同時に、学生自身の知識の定着や、学習意欲の向上に大きな意味があると考えている。今後は受講生に対するアンケートの実施など事業の成果を具体的に確認できるように務めていきたい。

2-2	地域貢献センター学生スタッフLink

事業担当者

教育学部　初等教育課程 杉山和輝

目的・概要

地域貢献センター学生スタッフLinkは、地域貢献センターを拠点に設立した学生によるボランティアセンターである。「Link」の名前の通り、学生が他の学生や地域の方たちと“結びつく”こと、また活動を通して、新たな自分へと“つながっていく”ことを目指して活動している。主として、①ボランティアの企画・運営、②SNS によるボランティア情報の発信を行っている。２つの活動を通して、ボランティアをしたい学生とボランティアをつなぐ場やボランティア同士の交流・情報共有できる場として活動している。

事業内容・方法

①ボランティアの企画・運営について

学生が地域の人たちと関わるイベントを企画し、その運営に学生がボランティアとして携わる活動である。

平成30年７月20～27日　西日本豪雨募金…常葉大学草薙キャンパス、学食・カフェにて募金活動

平成30年８月14日　常葉大学のお兄さん・お姉さんと遊ぼう

…大学近隣の小学生を対象に学習支援、学校探検

平成30年11月25日　秋の親子ドッジボール大会…大学近隣の小学生親子を対象に大学にて運動レク及びドッジボール大会を実施

令和元年８月10日　常葉大学のお兄さん・お姉さんと遊ぼう

②SNSによるボランティア情報の発信について

SNS（Line、Twitter、Facebook、Instagram）を用いて、サークル・個人・地域のボランティア情報を発信中

事業成果

平成30年７月20～27日　西日本豪雨募金…62060円　静岡新聞社を通じて被災地へ届けられた

今後の展開

ボランティア活動は、多くの人とふれあい、繋がりを持ち、お互いに学び合って「生きる喜びを確かめ合う機会を与えるもの」であると同時に、活動を通して知識や技術が身につくなど、ボランティア活動自体に大きな「教育効果」が期待できる。学生が関わり合うことで、お互いに刺激し合い、一人一人の成長や新たな挑戦へとリンクしていけるような組織にしていきたい。

ボランティア

つくる

ボランティア企画

「募金活動がしたい」　「授業で学んだことを小学生とふれあいながら実践したい!」など
学生の ○○したい!という思い から 企画を始めます。

・参加者、学生ボランティアの募集(チラシづくり)
・企画書づくり
・当日の準備　などなど

全て学生の手で
つくりあげます

ボランティア運営

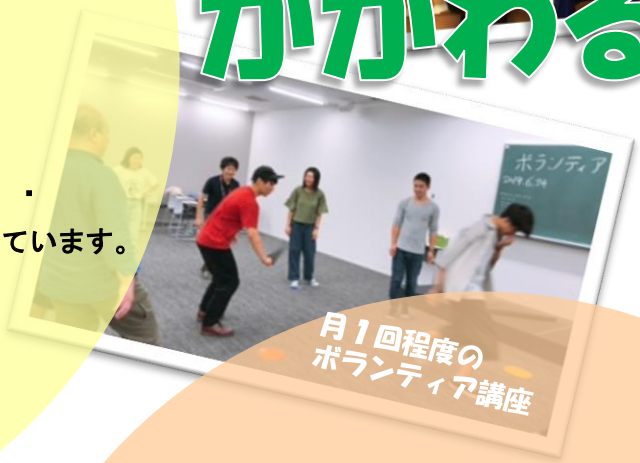
「就職のため」　「ボランティアに興味があったから」
ボランティアをする理由は 人それぞれ

どんな小さなきっかけでも
大学生がボランティアに 関わる機会を 増やすため
誰でも 参加しやすい活動に しています。

ボランティア育成

ボランティアの心得 や 活動で使える アイスブレイク ・
レクリエーションを 学ぶことができる 講座も 開講しています。

かかわる



ひろげる

情報発信

「やってみたいけど どんな活動があるかわからない」

そんな学生に向けて Instagram や Facebook を通じて
大学に寄せられたボランティア情報を発信しています。

地域貢献センター学生スタッフ

Link

2-3	小山町との協働事業： 金太郎を活用した町の広報戦略

事業担当者

（所属等は平成 30 年度当時のもの）

常葉大学経営学部竹安数博研究室　3 年鶴牧咲良、大西亜実、朝比奈一実、
4 年　丸山直美、安部史織、小鴨菜生、三宅満里奈、久保田麻友
日本大学短期大学部大久保あかね研究室　2 年　近藤舞奈、関美和、来栖真奈、中澤希、望月良之助　他
協働先：小山町商工観光課、ふじのくに地域・大学コンソーシアム、御殿場 DMO、道の駅ふじおやま　等

目的・概要

・静岡県駿東郡小山町の観光交流振興を目的とする
・小山町の特徴（金太郎の生誕の地である、世界文化遺産の富士山の麓である、富士スピードウェイ、ゴルフ場など、自然環境に恵まれている等）を活かす
・将来計画（工業団地、住宅団地、複合観光施設、宿泊施設等を整備する「三来拠点事業」）である
・地域資源の調査を通して、小山町の新たな魅力を掘り起こす
・町民の受け入れ態勢の整備、町民が自慢できるまちづくりにつなげる提言を行う

事業内容・方法

・研究期間：平成 30 年 7 月 20 日～平成 31 年 3 月 14 日
・実施場所：小山町役場・小山町周辺観光施設等
・実施項目：小山町の認知度調査・小山町内の金太郎実証研究（9 月 17-18 日）、資源調査報告会（9 月 18 日）
・活動報告：ふじのくに A&S フェア（11 月 28 日）、地域大学コンソーシアム報告会（2 月 16 日）
　　小山町 DMO フォーラム（3 月 15 日）

事業成果

・小山町において、金太郎の認知度をクイズ形式、うろおぼえイラストなどで対面調査
・金太郎実証研究は小山町内に存在するあらゆる金太郎をマップにまとめる
・アプリを活用した、金太郎マップやデジタルスタンプラリーのモデル作成

今後の展開

本事業は平成 28 年度から継続するものである。初年度は、道の駅「ふじおやま」における新商品開発に取り組み、2 年目はインバウンド観光客を対象とした地域観光資源の棚卸とモニターツアーの検証、3 年目は小山町のメインキャラクターである「金太郎」を活用したプロモーションの手法を開発する事業を行った。
これまで本事業を通し「小山町生まれの金太郎」を地域資源と捉えなおした広報戦略などを検討してきた。
本年度は、さらに具体的な「グッズ」を考案し、生産から販売、宣伝方法を検討する事業が進行中である。

常葉大学
TOKOHA UNIV.

金太郎を活用した町の広報戦略

Public relations strategy Oyama town using Kintaro

鶴牧 咲良、朝比奈 一実、大西 亜実、竹安 数博（常葉大学経営学部経営学科）、大久保 あかね（日本大学短期大学部）他
E-mail oyamakintaro@gmail.com
協力：道の駅ふじおやま、小山町商工観光課 課長 湯山氏、副主任 岩田氏、勝又氏、ふじのくに地域・大学コンソーシアム 大村氏、小山町 DMO 浅谷

【 目的 】

小山町は金太郎誕生の地であり、金太郎ゆかりのスポットが数多く残されている。町では金太郎をシンボルとして様々な場面で PR しており、観光のアンテナとして活用している。しかし、「金太郎生誕の地　おやま」という知名度は未だ低い状況にある。一方で、金太郎生誕の地である小山町は、世界遺産の富士山や富士スピードウェイ等の観光施設に加え、豊かな自然環境に恵まれている。また今後は工業、住宅団地、複合観光、宿泊施設等を設備する「三来拠点事業」が進められ、来訪者の拡大が予想される。町民を核とした来訪客受入態勢設備が課題となっている。本研究は、金太郎を活用した町の広報戦略を検討することで、小山町の新たな魅力を掘り起し、小山町民が自慢できる町づくりにつなげることを目的とする。

《 道の駅ふじおやまにて金太郎認知度調査の風景 》

【 調査実施概 】

実施日：2018 年 09 年 17 日（祝・月）
調査員：常葉大学生 8 人、日本大学短期大学部 5 人

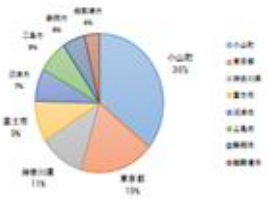
《 金太郎郵便局にて実証研究の風景 》

【 活動内容 】

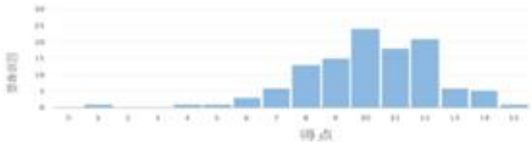
① 金太郎の認知度調査

調査内容：対面調査（小山町民・観光客・小山町役場の皆様）
・小山町の金太郎について 15 問のクイズに答えてもらう（男：51%　女：49%） 計 116 名
・うろおぼえ金太郎の絵を描いてもらう
調査場所：道の駅ふじおやま

《 認知度調査居住地データ 》



《 クイズの得点の分布 》



《 うろおぼえ金太郎のイラスト 》

② 小山町内の金太郎実証研究

調査内容：小山町内に存在するあらゆる金太郎をマップにする
・市内各所（金太郎の看板、銅像など）をくまなく探し、写真撮影
→カードゲーム（ポケモン GO をイメージ）の基礎データを作成
調査場所：道の駅ふじおやま、金時公園、郵便局、消防署、交通標識、案内板、110 番ステッカーなど

《 撮影した写真 》

《 ポケモン GO をイメージした小山町マップ（Cmapper） 》

Cmapper　http://www.cmapper.com/

《 金太郎のイラストを活用した事例 》

《 小山町デジタルスタンプラリー 》

【 結果・報告】

今後の計画としては、今回金太郎の活用状況調査を行った際に作成した Cmapper のアプリなどを活用したデジタルスタンプラリーなどの取り組みや、マンホールカードを模作した金太郎カードを作ることで金太郎の効果的な活用につながると考える。

小山町の関係者の皆さん、ありがとうございました！

《 金太郎カード 》

2-4	自転車ツーリズムとゲストハウスによる地域振興の研究 ～ツール・ド・フランス藤枝～

事業担当者

外国語学部英米語学科

18121120 湯原隼太 18121076 錦織杏　18121082 平岡彩苗　18121122 吉村祐豊　19121061 高橋慎太郎

教育学部生涯学習学科

18112121 川村遼亮　18112132 真田雅大

18112154 西村紗弥

目的・概要

- 自転車ツーリズムとゲストハウスによる地域振興の研究
- 2020 年オリンピック・パラリンピックのサイクリング 会場になることが予想され、海外からのインバウンド客や選手に安心して旅行や滞在をしてもらう。
- サイクリングやゲストハウスなどを利用し､海外からのインバウンド客に藤枝市の魅力を伝えると共に、今後の藤枝市のインバウンド振興の提言を行う。

事業内容・方法

- 小山町、さいたま市が行なっているサイクリングレースを調査し、藤枝市での大会開催、フィージビリティスタディを行う。またそれらによる経済効果、多文化共生への住民への意識改革等について研究を行う。
- ゲストハウスをネットワーク化し、それらを自転車で結ぶ英語・中国語版のツーリングマップを作る。

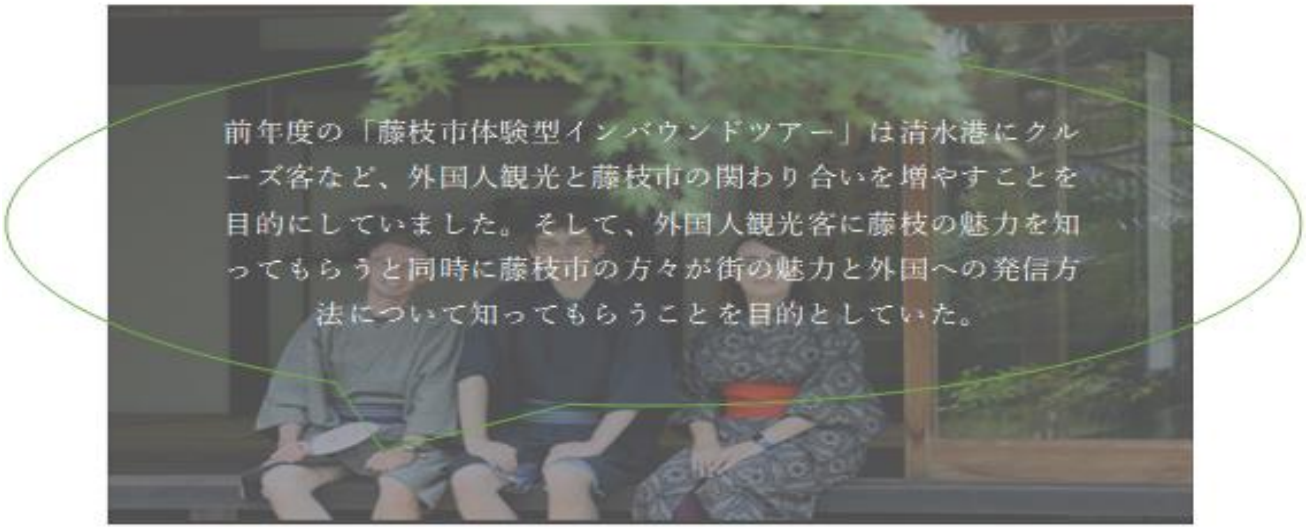
見込まれる事業成果・その後の展開

- 静岡県にあるゲストハウスと藤枝市内を自転車で結ぶルートを作り、外国語対応のマップを製作することで、オリンピックで訪れる外国人観光客を藤枝市に誘客するツールとなり、それらによる経済効果が期待できる。
- 瀬戸谷等の山間地で自転車競技の練習を行うことで、地域課題の山間地信仰も期待できる。

自転車ツーリズムとゲストハウスによる地域新興の研究

～ツール・ド・フランス藤枝～

責任者　外国語学部 英米語学科　湯原隼太



実践型体験ツアーによって

感じる

聞く　触る

交流

今回の私たちの研究する事業は、
２０２０年に開催される東京オリンピック・パラリンピックの自転車競技が静岡県で開催される予定です。それに伴い、外国語対応のコースマップ作成やゲストハウスの整備などを研究の中心として東海道ゴールデンルートに位置する藤枝市において、藤枝市の魅力を発信していき、さらなる藤枝市の発展を目的としています。

地域の人達と多く関わり、私たちがまだ知らなかった藤枝の魅力を感じられました。また海外の人達に藤枝の魅力を伝えられました。

ゲストハウスに英語はもちろん、様々な言語に対応した説明書きを作成して旅行者に快適な旅を??

ツーリングマップを我々で藤枝の魅力を直に感じながら作成??英語、中国語に対応のマップの為、インバウンド客にも楽しんでもらえます??

2-5	老若男女が立ち寄りやすい新たな居場所づくり ～学生が運営するコミュニティカフェ～

事業担当者

社会環境学部　社会環境学科（３年）山形日和（代表）、杉本葵（副代表）
酒井美奈、原田萌加、山本純礼、兼子みさと
経営学部　経営学科（１年）稲垣涼佳

目的・概要

2018 年 11 月に、焼津駅近くにコミュニティカフェを開業した。
焼津駅周辺には、居酒屋は多数ある一方で、子ども、若者、お酒を飲まない方が気軽に立ち寄れる場所が少ない状況であった。そこで、誰もが気軽に立ち寄れる空間として、カフェを立ち上げる。新たなコミュニティを作ることをミッションとして運営を継続している。

事業内容・方法

・毎週土曜日 11：00～17：00 のカフェの運営
・地域のイベントへの出店
・カフェでのイベントの開催

＜地域との関わり＞

NPO 法人わかもののまちや焼津市民活動交流センター、焼津駅前商店街通りの方々の協力により開業に至る。物件探しや、カフェ開業に必要なものなどを相談した。焼津駅前商店街通りにあるコワーキングスペースを借り、カフェを開きたい思いを地域住民に伝えるイベントの開催をした。

＜活動の流れ＞

平成 30 年 1 月活動開始。開業までに、学生が運営するカフェの視察と地域住民へ向けた視察報告会の実施。平成 30 年 11 月に大学祭出店の売上を初期費用とし、その後カフェを開業。

事業成果

常連さんがいたり、「カフェができて良かった」という声を聞いたりすることがある。焼津駅前商店街通りのイベントは過去に 2 回出店するなど、地域イベントへの出店を積極的に行っている。（過去 5 回）また、カフェを会場としたイベントを開催しており、平成 31 年 4 月には「みんなで美味しいおむすびを握ろう」、令和元年 7 月には「みんなでコースターをつくろう」の開催をした。

今後の展開

新たなコミュニティ作りのために、イベントの開催を継続して行う。また、カフェにはお客様が感想やアイデアを受け取れるノートが設置されているため、そこに書かれたアイデアを積極的に取り入れていく。新たな取り組みとして、「メニューの地産地消率の向上を図る」ことを考えている。これにより、食を通して人との繋がりを感じる空間を作るとともに、カフェが焼津の魅力の発信を担う場となることを目指していく。

老若男女が立ち寄りやすい新たな居場所づくり
～学生が運営するコミュニティカフェ～

社会環境学部　社会環境学科（３年）山形日和（代表）、杉本葵（副代表）
酒井美奈、原田萌加、山本純礼、兼子みさと、経営学部　経営学科（１年）稲垣涼佳

コミュニティカフェとは

人と人とを結ぶ地域社会の
場や居場所の総称。
普通のカフェと違い、
飲食を第一の目的とせず、
地域住民が集い、交流し、
情報交換することに重きを置いている。

これまで実施されてきたイベント

瀬戸川沿いでピクニック

「おむすびを握ろう」イベント

地域のイベントへの出店

焼津にカフェを開業した理由

2018 年 11 月に、焼津駅近くにコミュニティカフェを開業した。
焼津駅周辺には、居酒屋は多数ある一方で、子ども、若者、お酒を飲まない方が
気軽に立ち寄れる場所が少ない状況であった。そこで、誰もが気軽に立ち寄れる空間として、
カフェを立ち上げた。新たなコミュニティを作ることをミッションとして運営を継続している。

開業までの道のり

平成 30 年 1 月活動開始。開業までに、学生が運営するカフェの視察と地域住民へ向けた視察報告会の実施。
平成 30 年 11 月に大学祭出店の売上を初期費用とし、その後カフェを開業。

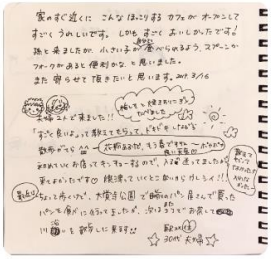
開業後の活動

・毎週土曜日 11：00 ～ 17：00 のカフェの運営
・地域のイベントへの出店
・カフェでのイベントの開催

店舗の様子

老若男女が立ち寄りやすい工夫

①ノートの設置
～小さな声を受け取るため～



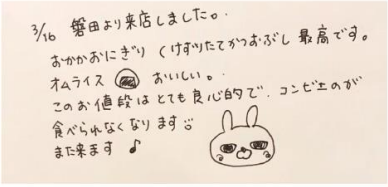
②絵本の設置
～小さなお子様が読むため～

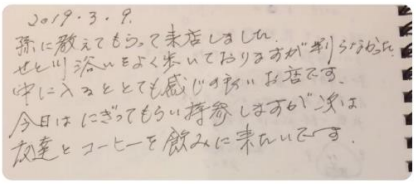
メニューのおむすび

今後の展開について

新たなコミュニティ作りのために、イベントの開催を継続して行う。また、カフェにはお客様が感想やアイデアを受け取れるノートが設置されているため、そこに書かれたアイデアを積極的に取り入れていく。
新たな取り組みとして、「メニューの地産地消率の向上を図る」ことを考えている。これにより、食を通して人との繋がりを感じる空間を作るとともに、カフェが焼津の魅力を発信を担う場となることを目指していく。

お客様の声





■静岡草薙キャンパス
〒422-8581 静岡市駿河区弥生町 6-1
TEL.054-297-6100(代表)
教育学部　外国語学部　経営学部
社会環境学部　保育学部
大学院　国際言語文化研究科
　　初等教育高度実践研究科
　　環境防災研究科
短期大学部　日本語日本文学科　保育科

■静岡瀬名キャンパス
〒420-0911 静岡市葵区瀬名 1-22-1
TEL.054-263-1125(代表)
造形学部
短期大学部　音楽科

■静岡水落キャンパス
〒420-0831 静岡市葵区水落町 1-30
TEL.054-297-3200(代表)
法学部　健康科学部

■浜松キャンパス
〒431-2102 浜松市北区都田町 1230
TEL.053-428-3511(代表)
経営学部　健康プロデュース学部
保健医療学部
大学院　健康科学研究科

常葉大学
TOKOHA UNIV.

発　行：常葉大学　地域貢献センター
発行日：令和元年 9 月 10 日
URL https://www.tokoha-u.ac.jp